

## 5. 2園のカイコの飼育を通して 江戸川双葉幼稚園(東京都江戸川区)・岡崎市緑丘保育園(愛知県岡崎市)

今年度の論文に、カイコの飼育について書かれているところが、4園ありました。カイコの飼育という同じ素材を扱っていますが、保育者の捉える視点によって、活動の展開が大きく異なります。その違いが保育の多様性を生み出し、奥深い経験をそれぞれ子どもたちは味わっています。

### 江戸川双葉幼稚園

#### 糸取り—命の葛藤と共に

園で生まれたばかりの蝶が園庭の主のようにになっているオオカマキリに捕らえられてしまった。羽化の途中で固くなって動かないままのセミヤトンポ。子どもたちは命の厳しさを目の当たりにする。カマキリが産卵の後死んでしまうこと。セミが地上ではたった1週間しか生きないこと。こうした厳粛さに触れてきて、そうしたさまざまな体験を土台として、繭を煮て、糸を取るという決断につながる。大きな心の葛藤を体験しているから、最後に残ったサナギを手厚く葬ることもできるのだろう。

#### カイコの飼育

卵の脇にごま粒みたいな小さな黒い点が見え、卵から出てきた頭だと分かった。それが出てくると、続いて胴体なのであろうスルッともう少し長く黒い部分が出、出終わると、卵は空になり、殻だけが白く残る。一瞬の出来事だ。殻から出ると、すぐ近くの葉に移ってゆく。不思議なくらい、すべて細く刻まれた葉の上に集まってしまふ。餌として用意した葉は、枝先の一番先端の小さな葉から3枚目の柔らかそうな葉。

子どもたち、まだ虫めがねを通して見ることの難しい子もいた。が、虫眼鏡で見た後、虫めがねをどけて、肉眼で見ると、ああ、小さいんだ、と改めて感動する。こんな小さい虫がそれでもしっかりと動いていること、生きていくことに驚いて、ことはも出ない。みんな机の前に張りついてしまふ身動きもせず、黒い小さな虫が卵から這い出てくる様子を釘付けだった。



#### 家庭での飼育

今年は、3齢になったかいこの幼虫を、希望者に分けて、各ご家庭で育ててもらうことにした。飼いは、子どもたちが園生活の中で、実際に携わっているの、大丈夫と任せることにした。帰宅する時に、餌となる桑の葉を持ち帰れば、何も大変なことはないだろう。6月3日、粘土ケースの蓋を持ってきてもらい、それに、2匹ずつ渡す。夕方、Rちゃんのお母さんから電話で、「いさむ」と「リンダ」と命名している、との楽しい報告。



#### 糸取り

カイコのサナギの入っている繭を煮てしまうことには、大きな葛藤がある。このまま、羽化して蛾にするのと、両方実践しようとは思っていた。でも、「本当に一本の糸なのかなあ」という子どものつぶやきが、この苦渋を救って道を開いてくれた。蚕の繭の糸取りをするために鍋の湯に繭を入れる。みんなの目が興味深く、「早く糸を見たい」という思いがひしひしと伝わってきた。F君は、「200個のカイコだから200本の糸が取れる」と言う。今から目の前で行われることに胸が一杯のよう。園長が、『かいこ』の絵本を読んでいる間、今までのカイコを通しての自分の体験が頭の中をいろいろよぎっているように感じた。そしていよいよ、糸取り。一人一人、湯の中の繭から、糸を画用紙に巻き取っていった。



#### 家庭での糸取り (Rちゃんのお母さんより)

「2匹頂いて帰り、親子共々せせと世話をしたのですが、1匹は何となくもう一方に比べ体もあまり大きくなり、糸を吐かずに、茶色くなり死んでしまった。もう一方の方は、黄色の見事な糸を出し、繭を作る様子に、兄のHも感動して見ていた。カイコを頂いてから、図書館で図鑑を借り、子どもに説明しなければならないので、改めて学習した。R子と2匹のカイコに「サフリーとワリー」という名を付け、非常にかわいがっていたので、茹でるのが、蛾にするのが、親として、非常に考えさせられた。こんなにかわいがっているから、蛾にかえそうと思っていたところ、幼稚園で先生が糸を取ったので、自分の繭からも、糸を取りたいとR子が主張したので、「それじゃあ、茹でたら中のカイコは死んでしまうので、土に埋めて天国に行かせてあげよう」と言うと、ちゃんとカイコの一生を分かっているらしく、悲しそうな顔をしながらも、『でも、糸を取るぞ』という気迫をR子より感じた。

## 岡崎市緑丘保育園

### 蚕の飼育

毎年全クラスで飼育、観察を重ねている蚕ではあるが、その積み重ねのなかで、年長児に対してはよりその成長や変化を、驚き、疑問、喜びなどの気持ちの深まりにつなげていけないものだろうかと考えた。昨年までは、まとめて育てる方法をとったのだが、今年度は一人に一匹ずつ世話をする方法をとることによって、昨年度までの姿との違いや、子どもの様々な気づきを保育者が受け止め、そこからひろがりを持たせ、次につなげられるよう保育を展開した。

### (けごさん こんにちは)

始めは、昨年同様のまとまった状態でけごと出あわせた。子どもの指で一匹ずつ触れることが出来たり触れてもつぶれない程度の大きさになるまでは、保育者のもとで世話をした。

子：「あっ、これ見た事ある」「蚕でしょう？大きくなると白くてふわふわになるんだよね。」「白い卵になるんだよね。」「違う、卵じゃなくて繭だよ。」など昨年の経験を、それぞれに思い出している様子が伺われた。

牛乳パックにひとりずつ名前を付けて一匹ずつ好きな蚕を選んで飼育、観察を開始した。一匹ずつ飼いはじめて五日を過ぎるころ、全員が糞を描くようになる。さらに体を曲げる動きや、桑の葉を食べる様子、体の模様を描いたり、足の数を数える、など細かい部分を観察するようになった。

子：「うんちきたない」と言う反面、「あげはの幼虫もするんだよ。」「家の赤ちゃんもするよ」「蚕のうんちは臭くないね、あげはの幼虫のうんちはみかんの匂いがするんだよ。」「蚕は、緑のはっぱを食べてもうんちは黒いね。」



### (たくさん食べてね)

子：「葉っぱが枯れちゃうよ。葉っぱ食べてよ」

脱皮も終わり、どの蚕も再び桑の葉を食べ始めた。

ところが、蚕の口は小さいからという配慮で、葉を小さくちぎってあげていた子の蚕が葉をほとんど食べず、成長も悪いことに気づいた。

保育士：「○○ちゃんの蚕、あまり大きくならないね。ご飯も食べないけどどうしてかな？」クラスの問題として受け止め考える機会を作った。沢山食べる蚕の状態と見比べさせたり、食べる様子などに視点がいくように言葉がけをし、子ども達同士で話し合えるようにした。

子：「蚕は葉っぱを抱っこして食べてるよ」「葉っぱの横から食べてるね。」「蚕って葉っぱを抱っこして食べるから、葉っぱが小さいと抱っこできないんじゃない？」「大きい葉っぱのまんまがいいんじゃない？」その場で他の子の提案を受け入れ早速、桑の葉を一枚与える。しばらくすると勢いよく食べ始める蚕を目にすることが出来、「私の蚕さん写真に撮って」と要求してきた。

### 〈本当に糸が出るのかな〉

子：糸巻きの道具をみると「これ糸車でしょ？」「糸をまくんではよ？」と、その状況をすぐに理解した。しかし繭から糸が出る様子を見ると「これ何？」と聞いてくる。

丸い形のもの再び糸として戻ってきたことは、子どもたちにとっては理解しにくい現象であった。またコロコロと動きながら繭が糸になってくところを見て、「繭まだ生きてるの？」と受け止めた子もいる。

保育士：「繭はあったかいお風呂に入ると蚕のはいた糸がはがれてくるんだよ」

と繭を煮た湯や繭からでてきた糸に実際に触れさせた。

子：「蚕の口から出たのとおんなじみたい」「くもの巣みたいだ」「鉛の糸みたい」と子ども達がそれぞれに感じたことを表現し始めた。また順番に糸車を回すことを経験させたことにより、「蚕の糸って細いけど切れないね」「くもの巣はすぐ切れちゃうよ」糸の美しさ、丈夫さなどを実際に糸に触れることで感触を実感していった。

### (最後のさなぎ)

子どもが育てた蚕を煮て糸を出し切った最後のさなぎまで見せるのは残酷なのではないかと検討したが、人間が便利に生活できている中には様々な犠牲もあるのだということを間接的にも感じ取ってもらいたいと願い最後の姿まで見せることにした。

糸を取り出していくうちに繭は透けてくるが、繭の大きさが原型(出来立て繭)と変わらないのを見て子どもたちは疑問に思ったようである。子：「外から段々糸を出して、体小さくなって、苦しくなって茶色になって死んじゃうんだよ」子：「蚕さん頑張ったんだね」とさなぎを触ったりまだ少しでてる糸を手で巻いたりしていた。



糸を染める



行灯作りに挑戦



機織り：絡まない様に気をつけて！

## ポイント

カイコの飼育を、江戸川双葉幼稚園では、園での経験を家庭で追体験しながら、カイコや糸への想いを深めています。緑丘保育園では、ひとり1匹ずつ育てるという責任を担いながら想いを深めています。

2園の違いは、方法論の違いだけでなく、視点の違い等多岐に渡ると思います。生命という問題にも立ち入らなければならぬカイコの飼育ですが、みなさんの園では、この2園の事例をどのように感じ、見取られるのでしょうか。